明日香村の地域づくりにおける 諸活動団体の活動からみた風景のとらえ方

Grasps of Scenery from the view point of Activities by Various Activity Groups
in the Regional Planning and Action of ASUKA-village

川口友子* 糸長浩司** 栗原伸治**

KAWAGUCHI Tomoko* ITONAGA Koji** KURIHARA Shinji**

(*日本大学大学院生物資源科学研究科 **日本大学生物資源科学部)

(*Graduate School of Bioresource Sciences Nihon Univ. **College of Bioresource Sciences Nihon Univ.)

I はじめに

1 背景と目的

風景・景観は、人を取りまく地域環境のさまざまな要素から構成され、地域独自の歴史、文化を表象する環境資源としてとらえられてきている。近年は、人々の風景・景観への関心も高まり、その創造^{注1)}を視野にいれた行政や民間団体による取り組みや活動が多くみられるようになった。それにとともに、アイデンティティを保ちつつ、地域独自の風景・景観を創造していく新たな方策が必要とされてきている。また、2005年6月には景観法が全面施行され^{注2)}、地域づくりにおいても、風景・景観の創造は重要な課題のひとつとして位置づけられるようになった。

風景・景観にかかわる地域づくりのあり方については、これまでも数多くの研究がなされてきた。なかでも、法や条例が制定された風景・景観を有する地域を事例とした研究では、実際のまちづくり事業と住民主体の活動組織との連動性を明らかにしたうえで、その効果を考察しているもの¹⁾や、景観条例によって指定された地域区分を都市計画法と照らし合わせ、条例の効果を検討しているもの²⁾などがみられる。しかしながら、いずれも法、条例自体の運用実態や、地域づくりの活動の体制や活動内容の評価、検討にとどまり、景

観にかかわる具体的な活動内容についてまでは言及されていない。また、地域資源を活用してまちづくりをすすめながら風景づくりのイメージを具体化していく、という手法の提示と評価をしている研究³⁾もみられるが、地域の風景の構成要素とそれに関する各風景づくり活動の記述、評価にとどまり、地域全体における各活動団体の関係や位置づけは明らかにされていない。

これらに対して、本論では「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」(1980年)の制定により歴史的風土の維持保全が図られている奈良県明日香村を事例として、地域づくりのなかでとくに風景にかかわる活動をおこなう諸活動団体の概要を把握し、そのうえで、各団体の活動目的、活動場所、活動内容を分析し、各団体の明日香の風景のとらえ方を明らかにする。さらに、それらが明日香村全体での風景づくりに対しても課題を明確にすることを目的としている。

2 方法と展開

まず、村の概要と総合計画、法制度の概要を把握するため、資料・文献調査^{注3)}と聴き取り調査をおこなった。ついで、風景にかかわる活動をおこなう諸活動団体の概要を把握し、各活動での風景のとらえ方を考察するため、2004年5月から11月の半年間、明日香村に定住してフィールドワー

クをおこない、聴き取り調査、参与観察^{注4)}を実施した。そのうえで、場所、活動内容とそこでの風景のとらえ方から、各活動の明日香村全体の地域づくりにおける位置づけについて評価、考察した。

II 明日香村の風景に対する取り組み

1 明日香村の概要と法制度

奈良県明日香村は、万葉集にも詠まれた歴史的、文化的な古都であり、村内いたるところに史跡や名跡がみられる。

古都保存に関する一般法は、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」、通称「古都保存法」があり、明日香村のほか、京都市、奈良市、鎌倉市、天理市、橿原市、桜井市、斑鳩町、逗子市、大津市の10市町村が適用対象となっている。そのなかでも明日香村については、特例として「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の

整備等に関する特別措置法」、通称「明日香法」が定められている。この明日香法によって、村全域が第1種、または第2種歴史的風土保存地区として都市計画決定され、地区内での建築、工作等の行為にはすべて許可申請が必要になっている。

村では明日香法にもとづいて「明日香村整備基金」を設け、村民の生活環境の安定向上や産業振興のために、大字管理組合への支援、農道整備などの生活に密着した事業をおこなっている⁴⁾。そのため、さまざまな規制を受ける状況にはあるものの、他の近隣地域に比べると、村民の生活環境基盤への満足度は高くなっている^{注5)}。

2 総合計画の施策にみる明日香の風景づくり

明日香村は、1999年に「第3次明日香村総合計画」を策定した。計画では、土地利用に向けた地域ごとの整備方針をかかげ(図1)、むらづくりの基本構想として3つのテーマを示している。それらのテーマと施策の大綱、それにもとづいてこれまでに実施された主な施策を表1にまとめた。

主な施策をみると、整備計画にもとづいておこなわれる道路や河川、農業用地等の整備事業が多い。これは村が、明日香法の趣旨に即しつつ、従来の歴史的風土の凍結的保存から、積極的な修景・活用、また維持活用保全に資する事業の積極的な実施に取り組み始めたためである^{注6)}。そのため、明日香法による土地利用規制が運用されているものの、村では風景にかかわるさまざまな施策を柔軟に実施している。しかしながら、テーマ、施策の大綱に「万葉」というキーワードを多くも

図1 土地利用の地域別整備方針

表1 むらづくりのテーマとこれまでの主な事業

むらづくりのテーマ	施策の大綱	これまでの主な施策
健やかで豊かな生活を 楽しむ	美しい居住空間の創造	集落環境整備基本計画策定、明日香村整備基金事業、電柱等の工作物の美装化・地中化
	万葉の道のネットワーク	都市計画道路の整備、村道・県道の整備、週遊歩道の整備、集落内道路のグレードアップ化(石畳等の特殊舗装)、飛鳥葛城自転車道の整備、自歩道整備*
	元気でたくましくむらづくり	下水道・消防施設・都市公園・保健福祉施設・教育文化施設等の整備、人材育成
	村民と国民の協調による保存	文化財保存、史跡地の公有化、史跡地環境整備
明日香の歴史・万葉へ の憧憬を育む	明日香・万葉を体感するための復元保存	飛鳥京復元模型の製作展示、飛鳥水落・石神遺跡周辺地区環境整備基本計画の策定、キトラ古墳石槨再現模型の制作
	情報提供による魅力再発見	観光キャンペーンの展開、観光パンフレットの製作、情報誌の発行、観光施設の整備(観光案内板・指導標・解説板・万葉歌碑)、インターネットによる情報提供
	万葉の田園の再生	河川整備、買い上げ地の管理活用、明日香村整備基金、棚田でのボランティアによる荒廃地の除草、河川等での桜・桃等の植栽、林道・作業道の整備、森林組合活性化事業(間伐・植林・枝打ち等)
	明日香を支える「農」の創生	農業基盤の整備(農業用道路、水辺環境事業、ため池・農道・用排水路等の整備等)、都市と農村の交流事業、農林商工まつりの開催
饗しの交流経済を興す	饗しの産業おこし	にぎわいの街づくり(商工会館の整備、観光会館の整備)、近鉄飛鳥駅の改築、観光ボランティアガイドの育成、観月会・新能の開催

※ 自歩道とは、自転車歩行者道を意味する。

ちているが^{注7)}、それに対する施策は、「万葉の風景」像がまだ曖昧であり、万葉集や万葉の時代の風景に明確にむすびつけることもできないままに、実際の施工が進められている状況にあるといえる。

III 諸活動団体の活動にみる風景のとらえ方

1 地域づくりにおける諸活動団体の概要

明日香村には、地元住民のほか多くの来訪者や研究者がかかわっており、それぞれの立場で地域づくりに取り組んでいる。そのなかでもとくに風景にかかわる活動をおこなっている団体を把握するため、各活動団体の活動について資料・文献調

査、地元の人の話などから概観したところ、

「棚田ルネッサンス実行委員会（以下「棚田）」、「飛鳥川」の原風景を取り戻す仲間の会（以下「飛鳥川）」、「神奈備」の郷活性化推進委員会（以下「神奈備）」、「にぎわいの街づくり委員会（以下「にぎわい）」、「景観ボランティア明日香（以下「景観）」の5団体があげられた。そこで、これらの団体に対して聴き取り調査（表2）をおこない、さらに現地において実際の活動に参加しながら、参与観察^{注8)}をおこなった。そして調査結果から、設立の経緯と目的、運営の体制、主な活動内容などの各活動団体の概要について明らかにし、各団体の組織構成を類型して、表3にまとめた。

これらの活動団体は民間団体として位置づけられるが、当初の設立のきっかけは「神奈備」は奈良県の事業と、「にぎわい」は村の街並み条例と、「景観」は村の景観整備活動支援事業とそれぞれ連動しており、行政が発足を促している場合が多い。そのため、発足後は行政と地元住民や村外の構成員が連携して運営をおこなっている団体もみられるが、独立した民間の活動団体として該当するのは、地元住民が発足し、地元と村外在住の構

表2 聴き取り調査の概要

名称(略)	調査日	調査対象者	方法
棚田	2004年7月13日	明日香村地域振興公社職員	面接
	2004年10月6日	村役場産業振興課職員	面接
飛鳥川	2002年7月15日	会長、事務局長	面接
	2004年11月7日	事務局長	面接
神奈備	2004年10月1日	村役場産業振興課職員	電話
にぎわい	2004年10月4日	会長	面接
景観	2004年7月13日	明日香村地域振興公社職員	面接
	2004年7月18日	会長	面接

表3 地域づくり活動の概要と活動内容

名称	設立年月	設立の経緯と目的	組織構成		主な活動内容
			運営の体制	模式	
棚田ルネッサンス実行委員会	1996.1	1995年に村おこしの一貫として発足。その後、地元の稲渚大字の自治会が中心となって設立し、1996年度から棚田オーナー制度に取り組む。都市との交流、地域での環境意識の向上、棚田の荒地地対策を図る。	稲渚の大字組織。委員長は稲渚大字の総代。村外の棚田オーナーたちも運営サポートを行う。	行政・地元・村外連携型 	米作り作業やイベント活動のほか、荒地地の利用、「すすき」の作成、案山子立てなどを行う。「棚田オーナー会」を結成し、各種部会構成での自主活動も行う。
飛鳥川」の原風景を取り戻す仲間の会	1999.11	飛鳥川の源流域である栢森大字の総代（当時）を中心に、ボランティア活動の案が生まれる。当初は地域振興公社と連動して活動していたが、活動団体として独立し、昭和初期の風景の再現をめざして活動を開始。	会長は栢森前総代。毎回参加者を募集し、常時60~70人が参加。常連も多く、運営サポートなどを行う。	地元・村外連携型 	栢森から女淵までの飛鳥川の両岸1kmを活動地域として、川岸の草刈り、清掃、遊歩道整備、植林や間伐等の山の手入れ、花の植栽など、年間5回程度の活動。
神奈備の郷活性化推進委員会	2002.8	県事業「神奈備の郷川づくり」と連携し、過疎化に対する活性化を目的として村の産業振興課が稲渚、栢森、入谷の奥明日香3地区に持ちかけて発足。	会長は稲渚前総代。各大字5名とボランティアで委員は20名。	行政主導型 	月に1回会合を開き、現在は特産品等研究開発部会、食材等供給部会がおもに活動している。現在、景観も含めた地域資源マップを構想中。
にぎわいの街づくり委員会	2003.5	2001年に村が制定した「にぎわいの街建築条例」を機に、2002年11月、生活を重視しつつ、観光客が集まるような街並み形成を目的として地元住民有志が準備委員会を発足。その後、正式に委員会として設立。	岡大字の住民からなる実行委員会が12名。会長は岡の前副総代。	行政・地元連携型 	月に1回会合を開き、勉強会やイベントの考案、集落景観統一の指針づくりなどを行う。独自の「デサイン」の行盤を作成し、「光の回廊」等のイベントに参加。
景観ボランティア明日香	2004.4	2002年11月に地域振興公社が主体となり「明日香らしい守るべき風景」の維持、継承を目的として、村外の人々を対象としたイベント型の景観整備活動支援事業を開始。その後、活動地の稲渚大字の協力を得て団体として設立。	会長は大学客員教授、副会長、運営委員は主に村の公社の職員。参加者は常時公募し、30名程が参加する。	行政・村外連携型 	2002年から毎年夏に2泊3日のボランティア活動をイベント型で実施。稲渚周辺の飛鳥川岸で草刈りや清掃等の整備、宿舎での講話などを行う。

※ 図中の二重線の丸は組織の運営主体、太線の丸は組織の事務局を示している。

成員が運営主体となっている「飛鳥川」だけだといえる。また「棚田」は当初村が始めた活動だが、現在では地元が自発的に活動主体を受け継ぎ、行政から支援を受けつつ活動をおこなっている。

活動の状況をみると、団体によって活動の熱に違いがあることが指摘できる。たとえば「飛鳥川」は、当初は村の地域振興公社と連携して活動していたが、活動趣旨、目的などの違いから、現在では独立した団体となり、活発な活動を定期的につづけている。一方、県と村が連携し、そのうえで住民側にもちかけて発足した「神奈備」は、大字の総代と役場関係者などが月に1回集まって会合を開いているものの、一部の活動をのぞき、現在いまだ準備委員会のような状況にある。「神奈備」の活動目的は、設立のきっかけである県の事業に由来しており、独自の目的を設定していない。「棚田」、「にぎわい」も行政の事業目的を継続しているが、現在では目的をより明確にし、それに相当する内容の活動を実施している。このことから、活発な地域づくりの活動を継続していくには、明確な活動目的の設定が一つの要因になるといえる。

2 活動の概要からみる風景のとらえ方

諸活動団体がどのような明日香の実際の風景を対象とし、それをどのような風景にしようとしているのか、各団体の風景のとらえ方について、活動の概要(表3)にもとづき考察をおこなった。

「棚田」は、村南部の飛鳥川上流付近に位置する稲淵大字の棚田を主な活動地域として、活動の主目的である農作業のほか、稲藁を積み上げた「すすき」や案山子などを作成する活動をイベント的におこなっている。これらは現在ではあまり見られなくなった農村の構成要素であり、「棚田」では、棚田がひろがる風景を対象として、現在よりも漠然とした昔の、棚田がある農村風景として風景をとらえていると考えられる。

「飛鳥川」は、明日香村のなかでも奥明日香と呼ばれる地域にある栢森大字のなかの飛鳥川源流域を活動地域として、「昭和初期の風景の再現」を主目的にかけ、草刈りや清掃、広葉樹の植林、山野草であるササユリの植栽、放置林の間伐などの活動を主におこなっている。このことから、「飛鳥川」では、飛鳥川源流域の風景を対象に、昭和

初期にみられた草花や樹木などの構成要素を復元させることで風景を再現しようとしており、昭和初期の里山と飛鳥川の風景として、風景をとらえていると考えられる。

「神奈備」は、飛鳥川源流域付近に位置する奥明日香3大字を活動地域としているが、現在の主な活動としては「地域資源マップ」の構想があるくらいである。今後は、マップをもとにした風景を維持・創造していくための取り組みや事業をおこないたいという意向があるようだが、Ⅲ-1で述べたように、団体独自の具体的な活動目的、活動内容が設定されておらず、活動における風景のとらえ方は明確ではないと指摘できる。

「にぎわい」は、江戸時代に宿場町・門前町として栄えた、村の中心街である岡大字を活動地域とし、活動目的を「町屋による街並の保全」、「特色ある集落環境創出」としている⁶⁾。しかしながら費用等の問題が多く、現在は主に大字特製の行灯によるライトアップのイベントや、花を植えた木製のプランターの配置などの活動をおこなっている。このように「にぎわい」では、街並みの風景を対象として、行灯などの構成要素を配置することによって街の歴史と調和した風景を目指しており、江戸時代の歴史的な街並みの風景としてとらえていると考えられる。

「景観」は、2002年から年に1回、これまでにまだ4回しか活動がおこなわれていない。そのため、各団体中で唯一活動規約を施行し、「歴史的景観や豊かな自然環境を維持・保全する」⁹⁾という明確な活動目的も明示しているが、今のところ、稲淵大字の飛鳥川流域における川岸の清掃、整備などの活動にとどまっている。このことから、「景観」では飛鳥川流域の風景を対象として、歴史的で豊かな自然環境がある風景を目指しているが、現在の風景に対しておこなうべき具体的な活動内容を設定しておらず、風景のとらえ方を明確にできていないと指摘できる。

以上から、各活動団体による風景のとらえ方として、以下の3つが明らかになった。

- ① 稲淵における棚田がある昔の農村風景
- ② 栢森における昭和初期の里山と飛鳥川の風景
- ③ 岡における江戸時代の歴史的な街並みの風景

図2 諸活動団体の活動場所と各場所での風景のとらえ方

各活動での風景のとらえ方は、いずれも現在ではない時代の風景を再現、創造しようとしている。しかしながら、昭和初期、江戸時代など目指す時代が明確である活動と、「歴史的」のように漠然としている活動がある。また、村の総合計画の大綱では「万葉の風景」がキーワードであり、これを歴史の時間軸でみたときに、多様な時代の明日香の風景をどう村全体の風景として調和していくのが課題となる。

IV 場所からみた

諸活動団体による風景づくり

1 場所と諸活動団体の活動

つぎに、Ⅲで把握した各団体の活動場所を明日香村の地図に配置し、明日香村全域における各活動団体の活動内容と風景のとらえ方について、場所の関係性から考察した(図2)。

活動場所の位置関係をみると、4団体が村南部の飛鳥川源流域に近い地域で活動しており、また、4団体が一箇所の大字だけを活動場所としている。そのため、各団体による風景にかかわる活動は、場所に偏りがみられ、村の風景を全体的にとらえた活動はほとんどみられないということがわかる。

各場所での活動内容としては、「にぎわい」、「棚

田」のように、目指す風景の構成要素を再生していく活動と、「飛鳥川」、「景観」のように風景に草刈りや清掃などの手入れをしていく活動の2つの型がみられる。そのうちの後者はいずれも飛鳥川流域での活動であり、その位置関係も近い。

また、各場所での風景のとらえ方は、各活動による風景のとらえ方が違うため、村のなかでも場所によって目指されている風景が異なっている状況である。

2 明日香の風景づくりの課題

以上の考察から、今後の明日香村の地域づくりにおいて、明日香の風景を創造していく課題としては、各団体でさまざまに継続されてきた活動を、明日香村全体のなかで総合的に調整していくことが求められる。場所によって異なる風景のとらえ方を生かし、一方で明日香村全体の風景としてどう創造していくのか。さらに、偏りがみられる飛鳥川源流域だけでなく、視野をひろげて村全体にわたっての風景づくりに発展させていくことが必要になっている。

V おわりに

本論では、奈良県明日香村を事例として、地域づくりのなかでも風景にかかわる、村の取り組み、

民間の諸活動団体による活動を分析し、それらの活動での風景のとらえ方を明らかにした。

結果、各活動団体によって風景のとらえ方が異なること、活動場所の偏り、歴史的な明日香の風景の多様性を明らかにし、明日香村における風景づくりの多様な面を指摘できた。そのうえで、明日香村全体での風景づくりにおいては、各活動団体が目指す風景をより明確にし、目指す風景像の総合化を図っていく必要があることを明らかにした。

今後の課題は、本論の結果を各活動団体の人々に提示して、人々の考えや意見を述べてもらい、それにもとづいて各活動が連携していくための方策を提案し、明日香村全体を対象とした風景づくりの方向性について考察することである。

注

注1) 維持や形成、保全など、さまざまなかたちで風景・景観を「つくる」という意味を含め、本論では「創造」ということばをもちいる。

注2) 景観法は、2004年6月18日に公布、同年12月17日に第三章を除いて施行され、2005年6月1日に全面施行された。

注3) 文献4)、5)、6)にもとづく。

注4) 「参与観察」とは、長期間にわたり調査対象である社会や集団の中に入りこみ、調査地の社会に「参加」しつつ、一步距離をおいた立場から対象者を「観察」し、生活や行動をともした体験を分析や記述の基礎におく調査方法のことを意味する。なお、本論での定義は文献7)を参考にしている。

注5) 奈良県橿原市、櫻井市、川西町、三宅町、田原本町、高取町、明日香村の7市町村合併をめざして2003年3月に設立された「中和地区市町村合併問題協議会」が実施した、「新市将来構想策定に関する住民アンケート

調査」の結果報告(文献8))にもとづく。なお協議会は、合併しないまま2003年12月に解散している。

注6) 文献4)p.104を参照。

注7) 明日香村の総合計画に対して、「明日香の歴史・万葉の憧憬を育む」のテーマを中心に、多くの人々は「万葉の風景」という言葉によって理解している。

注8) 各活動への参与観察は、表2に記した調査日以外にも日常的におこなっている。筆者が2004年5月から11月にかけておこなったフィールドワークのなかで、たまたま道端で活動参加者に遭遇したためそのままいっしょに参加した、など日常的におこなったものもある。そのため、ここでは具体的な調査日は明記しない。

参考・引用文献およびウェブサイト

- 1) 松元清悟 野嶋慎二 塚本雅則(2003):持続的なまちづくりと連動した街並み景観形成に関する研究—滋賀県近江八幡市の事例より—, 日本建築学会計画系論文集, No.565, pp.193-200.
- 2) 宮脇勝 北原理雄(2002):都市計画法の用途地域制と景観条例の景観地域区分の整合性に関する研究—千葉県柏市景観形成ガイドラインの事例—, 日本都市計画学会都市計画論文集, No.37, pp.997-1002.
- 3) 松本篤 岡田雅代 坂井えりか 千葉晋也(2005):場所と人が育てる風景づくりへの展望—世田谷区風景づくり条例に基づく地域風景資産を手がかりとした生活景のデザイナー—, 日本建築学会総合論文誌第3号『景観デザインのフロンティア』, pp.108-113.
- 4) 明日香村(1999):『第3次明日香村総合計画』, pp.1-112.
- 5) 総理府 内閣総理大臣官房管理室(編)(1991):『明日香村—古都の現況とその保全・整備—』, pp.1-75.
- 6) 明日香村役場:明日香村ホームページ,
<<http://www.asukamura.jp/>>, 2005年4月26日, 2005年4月29日.
- 7) 佐藤郁哉(1992):『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』, 新曜社, pp.129-135.
- 8) 中和地区市町村合併問題協議会事務局(2003):『中和地区市町村合併問題協議会だより第5号』, pp.4-11.
- 9) (財)明日香村地域振興公社:景観ボランティア明日香規約, <<http://www.5.kcn.ne.jp/~yume-ask/boranthia4.htm>>, 2005年6月11日, 2005年8月3日.

ASUKA-village has wrestled with the maintenance of the historical landscape as a part of regional planning. In this paper, it aims to clarify the grasps of this landscape according to the works of the administration and the activities of the regional planning in ASUKA. As a result, it was clarified that the grasps of scenery is different to each activity group, and we were able to point out various sides of the making scenery. In addition, we clarified the necessity of the cooperation with each activity, as making scenery of the whole ASUKA.